

2

植民地期インドの出版物にみる 日本表象

——20世紀初めのグジャラーティー語出版物の事例から——

井坂理穂

本ブックレットの冒頭で示したように、第2部では、第1部で紹介した「アジアの形成」プロジェクトの議論を踏まえながら、「知の創出と循環」グループのなかで筆者が進めている事例研究のひとつを紹介する。ここでの目的は、植民地期のインドで出されたグジャラーティー語の出版物に現れる日本についての描写・表象を読み解きながら、それらがどのような背景のもとにどのようなかたちで表されているのか、そこからいかなる知識・情報の流れや再構築の過程を読みとることができるのか、「アジア」概念はそこにどのようなかたちで立ち現れているのか、などの問いを検討することである。以下、ここで扱うテーマにいたった経緯も含め、順を追って説明していきたい。なお、本研究を「アジアの形成」プロジェクトの一例として示すという趣旨から、ここでは分析対象を3点に絞り、背景となる植民地期のインド西部の政治・経済・社会状況に関する説明もできる限り簡潔なものにとどめた。

植民地インドで日本を語る

「インド独立の父」と呼ばれるモーハンダース・カラムチャンド・ガンディー、独立後のインドの初代首相となったジャワハルラール・ネルー、アジアで初めてノーベル文学賞を受賞したラビンドラナート・タゴールをはじめ、植民地期インドの著名な指導者、知識人の著述や演説を読んでいると、アジアにおいていち早く「発展」を遂げた国として日本が言及されている箇所に遭遇することがある（のちには軍事侵攻を続ける日本への失望や批判もそこに含まれるようになるのだが）。彼らの日本認識については、これまでも日印関係史に関心をもつ歴史研究者たちによってたびたび取り上げられてきた。しかしこれらの著名な人々の語りとは別に、植民地期インドにおいては、このほかにも様々な人々が、様々なかたちで日本について語っている。例えば筆者はこれまで、自分の研究対象である19世紀後半から20世紀前半にかけてのインド西部の出版物を調べるなかで、上記のような著名知識人たちのものとは趣を異にする日本表象に出くわすことが

あった。そのなかには、「発展」に成功した「見本」としての日本を語るものばかりではなく、女性の美しさやお歯黒の習慣、結婚の慣習などを、「異国」への好奇のまなざしを感じさせる表現で描いているものもあった。

いわゆる「西洋」の出版物における日本の「珍しい」慣習・風俗に関する描写・表象については、これまでしばしば分析・議論の対象とされ、ときにはサイドの「オリエンタリズム」の概念も参照しつつ、そこに現れる「まなざし」が論じられてきた。これに対して、インドの在地諸語出版物における多彩な日本の描写・表象については、必ずしも十分には検討されてこなかったように思われる。しかしながら近年、「西洋」と「東洋」という枠組みを超えて、いわゆる「アジア」や「グローバル・サウス」内部の地域間の接続性についての研究が進むなかで、植民地期インドにおけるアジア諸地域（日本も含め）に対する理解、認識についても、新たな視点からの研究が進展しつつある。そこではタゴールと岡倉天心などの著名な知識人同士の交流や、政治指導者たちの言説のなかに現れる日本表象ばかりではなく、より広範な人々の日本像に焦点が当てられるようになって¹⁴。以下ではそれらの研究動向や、「アジア形成」プロジェクトの議論を念頭に入れつつ、20世紀初めに出版されたグジャラーティー語文献3点の分析を通して、アジアにおける知識・情報の流れやその変化を探ってみたい。

文献(1)(2)——学校教科書——

まず、ここで分析対象とする3点のグジャラーティー語文献について説明しておこう。今回は共時的な比較を行うために、ほぼ同じ時期に刊行された出版物を扱っている。なお、グジャラーティー語は、ヒンディー語、サンスクリット語などと同じく、インド・ヨーロッパ語族のインド・イラン諸語に分類される言語である¹⁵。ここで扱う文献の出版年に近い1911年のセンサス(国勢調査)によれば、当時のグジャラーティー語話者人口は1068万人であった [Gait 1913: 339]。同時期のインド人口(ビルマも含む)は3億強であり、グジャラーティー語話者がインド人口全体に占める割合は大きくはないのだが、彼らの在住するインド西部、グジャラート地方は古くから商工業活動が活発であり、グジャラーティー語は商人のことばとしてイン

14 例えば、昨年末に刊行されたナイル・グリーン著『アジアはいかに自身を見出したか——文化間理解の物語——』(2022年)は、1840年から1940年までの時期を対象として、インド・パキスタンから中東にいたるまでの「アジアの半分」が、スリランカやミャンマーから中国、日本にいたるまでの「もう半分」のアジアの社会や文化をいかに理解しようとしたのかを、広範な地域の出版物をもとに分析している [Green 2022]。そのほかにも、植民地期インドの在地諸語出版物を用いながら、そこに現れる日本像、中国像を個別に論じた研究も現れている (例えば Basu [2022], Sheel [2021], Yang [2021] などを参照)。

15 グジャラーティー語、グジャラーティー語文学概説については、井坂 [2021] を参照。

ド洋海域も含む広範な地域で知られていた。

グジャラーティー語話者はグジャラート地方のほか、植民地期に大きく発展したボンベイ市にも多数在住している。イギリス植民地期の行政区分では、グジャラート地方は、その一部はボンベイ管区のなかに、他の部分は藩王国地域に含まれていたが、グジャラーティー語出版物はこれらの区分を超えて広く流通していた。独立を経て、1960年にはグジャラーティー語話者が多く住む地域からなるグジャラート州が成立し、その翌年にグジャラーティー語はこの州の州公用語に指定されている¹⁶。

ここでの分析対象となる文献3点のうち、最初の2点は、20世紀初めに使われていたグジャラーティー語の学校教科書に掲載されている文章である。この教科書が対象としていたのは、グジャラート地方、及びボンベイ市のグジャラーティー語を教授言語とする学校に通う生徒たちである。グジャラーティー語による学校教材は19世紀前半から部分的に作成されていたが、まとまったかたちで学校教科書が発行されたのは1857年から1860年にかけてであった。これらはボンベイ管区政府・北部地区の教育視察官であったT・C・ホープの主導下で、在地の知識人たちが協力するかたちで編纂されている [Covernton 1906: 26, 29-31; Isaka 2022: 72]。第1学年向けから第7学年向けまでの7冊がシリーズとして作成され、そのそれぞれには詩や物語から自然科学にいたるまで、多様な分野のテーマの文章が盛り込まれた。19世紀の終わりにおいてもインドの識字率は男性でも10パーセント程度、女性にいたっては1パーセントにも満たなかったことを考えれば [Baines 1893: 210, 214]、教科書を手にする子どもたちは、全体数のなかではごくわずかであったことは間違いない。とはいえ、1892年までには、この7冊及びその他の5冊の教科書の発行部数の総計が550万部にまで達していたとの記録もあり、これらの教科書はある程度広範囲に流通していたことがうかがえる¹⁷。

19世紀後半には植民地政府のもとで、インド各地で教育制度が整備され、初等教育から高等教育にいたるまでの流れがつくられていった¹⁸。これらの教育制度はボンベイ管区内だけではなく、藩王国地域においても、それぞれの藩王国でその速度や程度に差異はあるものの、ボンベイ管区の事例に倣うかたちで整備されて

16 グジャラート州ではインドの連邦公用語であるヒンディー語も、もう一つの州公用語に定めている。

17 A letter from T.C. Hope to the Director of Public Instruction, 10 December 1892, Educational Department, 1894, vol.55, no.686, Maharashtra State Archives. 19世紀後半のグジャラーティー語教科書の詳細については、Isaka [2022] 第2章、第4章を参照。

18 植民地期のインドでは初等教育は在地諸語で行われ、高等教育は英語を媒介として行われた。詳細については、井坂 [2022] を参照。

いく。こうした流れのなかで、西洋の諸学問の影響やイギリス人植民地官僚からの働きかけのもとで、上位カースト知識人の間では、教育・文学活動を通じてグジャラーティー語の「標準語」を規定し、これを広める動きが活発化する。「ホープの教科書シリーズ」とも呼ばれたグジャラーティー語の学校教科書は、初等・中等教育のあり方を方向づけるうえでも、グジャラーティー語のあるべきかたちを規定するうえでも、重要な役割を担っていた。

管見の限りでは、19世紀後半の段階では、このグジャラーティー語教科書のなかに「日本」というタイトルがついた課は見当たらない。「日本」に関する文章がまとまったかたちで教科書に入ってくるのは、20世紀初めに大がかりな教科書改訂が行われたのちのことである。このときの教科書改訂は、政府が設置した委員会のもとで決められた改訂方針に沿って行われた。ボンベイ管区では、上述のグジャラーティー語教科書ばかりでなく、ほかにもマラーティー語、シンディー語、カンナダ語で学校教科書がいずれも19世紀後半にそれぞれ別途に編纂・出版されていたのだが、20世紀初めの改訂にあたっては、これらすべての言語の教科書に関わる全体方針がまず定められた。教科書改訂委員会には、それぞれの言語集団出身の教育関係者やその他の分野で活動する知識人が招かれ、彼らは外部への諮問も行いつつ、1903年から1905年まで検討を重ねている [Covernton 1906]。

改訂後のグジャラーティー語教科書シリーズでは、第6学年向けの教科書のなかに「第75課 中国と日本」という見出しのついた課が収録されている。なお、筆者は同教科書について、1907年に刊行されたものと1917年に刊行されたものとの2種類を閲覧したことがあり、1907年版にも「中国と日本」の文章があったことは確認しているのだが、現在手元にあるのは1917年版の複写のみである。おそらく両者は同じ内容であると推定されるものの、ここでは1917年版を用いて分析を行っていることをお断りしておきたい。

改訂後のグジャラーティー語教科書シリーズのなかには、このほかにもう1点、日本をテーマとした文章が収録されている。それは、『女子教科書シリーズ 第3巻』所収の「日本の女性」と題された文章である。女子教科書シリーズは、これ以前には発行されておらず、20世紀初頭の教科書改訂に伴って新たに作成されたものである。前述の教科書改訂委員会は、女子教育に関しては、低学年（第1－3学年）では男女共通の教科書を、高学年（第4－6学年）ではより女子に特化した内容の教科書を用いることが望ましいとの結論を出す [Covernton 1906: 33, 67-68, 106]。当時の女子教育は、前述の識字率からも明らかであるように、ごく一部のエリート家庭の女子のみを対象としたものであり、しかも女子教育は主に家庭や女子校で行われていた。結婚を契機に通学をやめる場合も多く、女子教

育はよき妻、母を養成するためのものとして位置づけられていた。エリート家庭の女子のなかには、高等教育機関に進学し、さらに社会・教育運動に関わったり、知識人として活躍する者もいなかったわけではないが、そのような例はきわめてまれである。女子にふさわしい教育を念頭に、高学年においては女子用に別途に教科書を作成するという方針は、こうした実情を反映したものであった¹⁹。

この方針のもとに、1907年ごろにはグジャラーティー語の『女子教科書シリーズ』の第1－3巻、すなわち、第4学年用から第6学年用までの教科書が刊行される。これらのなかには、詩や物語、道徳、歴史や地理、自然科学、さらに家計、衣服、衛生などの内容が含まれていた [Covernton 1906: 80]。このうちの第3巻、すなわち第6学年向けの教科書に入っていたのが「第16課 日本の女性」という見出しのついた文章である。なお、この課の末尾には太字で『地球周遊 (Gomandal Parikram)』という言葉が記されていることから、この文章は、カーティヤーワード半島 (グジャラート地方の半島部) にあるゴーンダルと呼ばれる藩王国の王妃であったナンダクンワルバー (Nandakunvarba 1867-1936) によって執筆された同名の旅行記 (1902年に刊行) からの抜粋であると推測される²⁰。19世紀末に、ゴーンダル藩王である夫とともに、ヨーロッパ、アメリカ、日本、中国、オーストラリア、スリランカなど世界各地を訪問した彼女は、そのときの経験をグジャラーティー語でまとめている。同旅行記の一部が女子用の教材としてふさわしいものとしてこの教科書に掲載されたのである。男子向け、女子向けの教科書における日本描写の違いについては、後節でさらに考察を加える。

文献(3)——『日本語ガイド』——

上記の2点が学校教科書に掲載された文章であるのに対して、第3点目の文献は、学校教育とは関わりのないところで執筆され、販売されたものである。教科書がその性格上、「売れる」ことを目指しながら編纂されるものではなかったのに対して²¹、3点目は商業出版物であり、「売れる」ための工夫が必要な出版物であった。以下で内容を検討するにあたっては、こうした出版物の性格も念頭においておく必要がある。

3点目の出版物は、『日本語ガイド (Jepani Bhashano Bhomiyo)』と題された

19 なお、男子生徒のためには第7学年まで教科書がされていたのに対して、女子教科書は第6学年で終わっていたことにも留意したい。

20 この旅行記については、Bhalodia-Dhanani[2012: 224-225], Lambert-Hurley and Sharma[2010: 248] に言及がある。

21 ただし教科書自体にも価格がついており、1906年段階では1学年向け教科書は2アンナ、7学年向けは14アンナに規定されている [Covernton 1906: 106]。

100ページ弱の本である。ボンベイで出版されており、刊行年は1906年ごろと推定される²²。前半部が日本語教材、後半部が日本紹介に充てられており、以下では後半部、すなわち、日本の風俗・慣習や著名人の人物伝などからなる日本描写の部分进行分析対象とする。この部分には数多くの挿絵が含まれ、日本という「異国」への人々の好奇心に訴えかけるものとなっている。

本の著者であるラタンジー・フラームジー・シェートナー (Ratanji Framji Shethna) は、このほかにもグジャラーティー語の著作を数多く出版している。シェートナーの経歴については、残念ながら詳細は不明だが、この『日本語ガイド』の記述は英語文献に大きく依存していることが感じられ、英語の知識を身につけていた人物であると推測される。彼の著作のうち、広く知られているのは、グジャラーティー語で記された百科事典である [Shastree 1980: 37]。また、19世紀後半にボンベイの演劇文化として栄えていた「パールシー・シアター」のための戯曲も執筆していたようである [Hansen 2018: 65]。パールシー・シアターとは、パールシー (インドのゾロアスター教徒) が中心となって設立・運営された劇場や劇団であり、この演劇文化は、パールシーに限らず広く都市中間層の娯楽として1930年代まで栄えていた。なお、シェートナー自身も、その名前からパールシー・コミュニティの出身者であったと推測される。

ここで、この「パールシー」について若干説明を加えておきたい。パールシーとは、8-10世紀ごろにイランからインド西部に移住したと考えられているゾロアスター教徒の子孫である。ヨーロッパ勢力がインドへの進出を始めると、インド西部の交易拠点では、パールシーが通訳や仲介者として活躍するようになり、18世紀終わりごろからは多くのパールシーが、イギリスのもとで発展しつつあったボンベイ市に居住するようになった。彼らのなかからは、中国貿易をはじめ、商工業の分野で成功を収める人々が現れるようになる。また、パールシーの家庭では、植民地支配下で導入された英語による高等教育を、子どもたちにいち早く受けさせる人々も多く、官僚職、専門職、商工業活動などの幅広い分野でパールシー出身者の活躍がみられるようになる。社会改革運動やジャーナリズム、出版業界でも、彼らが指導的役割を果たしている。彼らの活動は日印貿易にも及んでおり、横浜には1870年代からパールシー商會が参入していた [寺本 2016]。

22 本書には出版年が記されていないが、後述するように日本の人口の推移を記した箇所では1905年までの数字が記されていることや、末尾の人物伝が1905年ごろまでで終わっていることから、1906年ごろに刊行されたものと考えられる。1915年に刊行されたマラーティー語・グジャラーティー語出版物目録のなかでも本書の出版年は1906年と記されている [Blumhardt 1915: 200]。なお、本ブックレットではグジャラーティー語をローマ字表記するにあたり、ダイアクレティカルマーク (発音区別符号) は省略している。

ここで扱う『日本語ガイド』については、ナイル・グリーンの『アジアはいかに自身を見出したか——文化間理解の物語——』(2022年)のなかでも若干触れられている。そこでは、同じくパールシーであるディーンシャー・ヴァーニヤー著の『日本語の教師』(1905年)とともに本書が紹介され、日印貿易を主導するグジャラート出身のパールシー、ムスリム、ヒンドゥー商人に向けて出された、実用的な日本語教材として位置づけられている [Green 2022: 161-162]²³。実践的な会話にすぐに役立つような内容をもつ本書の性格から考えても、この捉え方は妥当であると思われる。ボンベイはグジャラーティー語を話す商人コミュニティにとって重要な貿易拠点であり、インド洋世界における情報の拠点でもあった [Green 2011, 2022; 井坂 2016]。この都市で実用的な日本語ガイドがパールシーによって執筆され、出版されていたことは象徴的である。

しかしここでは、『日本語ガイド』が日本語表現を知るためのテキストであったばかりでなく、読みものとしての性格も兼ねそなえた出版物であったことに注目したい。グリーンが分析対象としなかった後半部の日本描写からは、そこに含まれる挿絵とともに、同書の娯楽的側面がうかがえる。なお、本書は作者ばかりでなく、その出版・販売を担当したのも、ピローズシャー・ディーンシャー・ムカーダムというパールシーの名前をもつ人物であった²⁴。グジャラーティー語の出版活動やジャーナリズムにおいては、パールシーはその創成期から指導的な役割を果たしており、数々の新聞がパールシーによって経営されていたほか、娯楽向けの出版物の世界でもパールシーの作家や出版者が活躍している [Isaka 2022]。シェートナーが執筆した『日本語ガイド』も、ボンベイにおけるパールシーの活発な出版活動のなかに位置づけることができるだろう²⁵。

それでは次に以上の3点の文献のそれぞれについて、その内容を詳しくみてみよう²⁶。

23 筆者に本書の存在を知らせてくださったブラシャント・パルデーシー氏 (Prashant Pradeshi, 国立国語研究所) にも感謝の意を表したい。氏の研究テーマのひとつが、インドにおける日本語教育・研究の分析であり、その成果が近く刊行される予定である。

24 本書はその表紙に記されているところによれば、1ルピーの価格で売られていた。

25 本稿では、この出版物の内容に焦点を当て、ここで用いられているグジャラーティー語の言語としての特徴については分析対象としていない。パールシーの用いるグジャラーティー語は、しばしば「パールシー・グジャラーティー語」と呼ばれ、発音、綴り、語彙において独特の特徴をもつと指摘されてきた。『日本語ガイド』にもこれらの特徴が認められるのだが、この点については当時のグジャラーティー語の言語改革をめぐる議論とあわせて、別途取り上げたい。

26 以下のテキストの翻訳作業は、ルチャー・ブラフマバット氏 (Rucha Brahmabhatt, グジャラート大学サマルパン文科商科カレッジ) と共同で行った。氏の多大なご協力に謝意を表したい。

「中国と日本」

この文章は、前述のように20世紀に入ってから改訂されたグジャラーティー語教科書シリーズのうち、『グジャラーティー語教科書 第6学年』の歴史・地理のセクションに、第75課として掲載されたものである〔*Gujarati Chchatthi Chopdi* 1917: 212-215〕。文章には出典や筆者名は記されておらず、この教科書のために執筆されたものと推測される。

文章の前半部には中国、後半部には日本の情報がまとめられている。いずれもその冒頭部分では、地理上の位置、自然環境、資源、人口や人種上の位置づけなどが記されている。世界の国々や地域を紹介するときにはどのような情報を掲載すべきかについては、イギリスの学校教科書などをモデルにしていると推測され、具体的な記述のための情報源も英語文献に依るところが大きかったと思われる。ただし、中国の面積を記す際にインドと比較するなど、教科書の読み手にあわせて記述も見られる。

当時の欧米のアジアをめぐる言説にしばしばみられるように、この課においても、中国の西洋に対する姿勢と日本のそれとが明らかに対比的に描かれている。このような対比は、人種に関する説明が終わったあとの部分の記述に現れている。中国については、「彼ら自身は賢く勤勉だが、外国人との交流がないために、今や後進状態に陥っている」とされ、さらに軍事や工業など諸側面での後進性や改革の遅れが指摘されている〔*Gujarati Chchatthi Chopdi* 1917: 212〕。これに続いて、やや唐突にもみえるのだが、中国の服装についての説明が続く。男性については、「この国では、男性の衣服は女性のものであり、よそ者は彼らを女性と見間違える」と述べられ、辮髪についての説明が続く。女性については纏足の慣習が紹介されている（ただしその慣習は徐々に衰退しつつあるとも述べられている）〔*Ibid.*: 212-213〕。その少し後には、米食や茶の習慣など食についての描写があり、「彼らはねずみや虫さえも省きはしない」として、その食習慣の特異性が強調されている〔*Ibid.*: 214〕。

一方、日本については、地理上の位置や自然環境、資源、人種などの説明が終わると、日本の発展の速さが、中国や西洋との比較を用いながら語られている。そこでは、長い間、日本の人々の状況は中国と同様であったが、過去50年間に大きく変化し、「今やあらゆる面で、中国よりもはるかに進んで」いるばかりでなく、「西洋の国々の進歩的な人々と肩を並べるまでに」なっていると結論づけられている〔*Ibid.*: 214〕。その背景としては、日本が多くの優秀な人材を欧米に送り、工場、教育、行政、軍備などを学ばせたことが挙げられている。さらに日本が軍事に長けており、ロシアとの戦争において大勝利をおさめたことも述べられている。

次の段落では商業の発展のありさまが語られる。欧米の国々でつくられていた品々を日本が製造し、輸出し始めたこととあわせて、日本製のマッチがインドで広く使われていることが指摘されている [Ibid.: 215]。ここでもインドに言及することで読み手の注意を引こうとしている様子が確認できる²⁷。

以上のように、中国についての記述とは対照的に、日本についての説明には風俗・慣習に関する記述は一切含まれていない。ここでの日本は中国と明らかに対比させられながら、近代化のモデルとして描かれている。一方の中国については、その後進性が強調され、それに続けて人々の衣食における独特の慣習を描くことで改革に消極的な国というイメージをさらに際立たせている。

ところが、ここでの日本描写のなかではまったく触れられていなかった日本の風俗や慣習は、以下にみる女子用の教科書では細かく紹介されている。そこでは「中国と日本」が示すような目覚ましい速さで近代化し、変貌を遂げる日本という描かれ方とは対照的に、伝統を維持する日本社会のあり方が、女性の姿や女性にまつわる慣習を通じて提示されている。それでは次に女子に向けて作成された教科書にみられる日本描写を、細かくみてみよう。

「日本の女性」

「日本の女性」(複数形を翻訳に反映させるならば「日本の女性たち」)と題する文章は、前述のように、『女子教科書シリーズ 第3巻』、すなわち第6学年の女子生徒向けの教科書に収録されている。男子向けの教科書では各セクションに「歴史・地理」などの分野名が記されているのに対して、この教科書の場合には各セクションに番号しかつけられていないのだが、内容から判断すると第2部が歴史・地理を扱っている。しかし「第16課 日本の女性」が登場するのは第2部ではなく、詩や物語などが収録されている第1部のほうである。

「日本の女性」は、著者名は書かれていないものの、末尾に『地球周遊』という書名が記されており、前述のように1902年に出版されたゴーンダル藩王妃ナンダクンワルバーの旅行記から抜き出したものであると推定される。文中では日本の慣習とカーティヤード半島の慣習とを比較している箇所もあり、ナンダクンワルバーの住むゴーンダル藩王国がこの半島部に位置していたことを考えれば、このような比較がなされているのもうなずける。

ページを開いてまず目につくのは、「日本の女性」という見出しのすぐ下にある挿絵である。そこには、着物を着た女性3名——ひとりとは和傘を、ひとりとは赤

27 なお、この課には北京と横浜の風景を描いた挿絵2枚が掲載されている。

ん坊を背負い、もうひとりとは背中を向けている——の立ち姿が描かれている。このような見慣れない服装の女性たちを描いた挿絵は、生徒たちの関心をひきつける上で大いに効果があったであろう。文章に入ると、まずはじめに、日本における女子の位置づけが語られる。日本では子どものころから女子が手厚く世話をされることが述べられたあとで、その一方で「我々インド人と同様に、女子より男子の誕生のほうが家の人々には喜びを与えるものとみなされている」との記述が続いている [Kanya Vachanmala 1907: 34-35]。この文章では、以下にみるように地域間比較の視点が頻繁に現れている。このすぐあとにも、日本の女性教育はマヌ法典に基づいているように思われるとして、日本の女性が子どものころには両親に、若いときには夫に、夫の死後は息子に従うべきとされていることが説明されている。

これに続いて、今度は日本における女子教育や結婚の様子に注意が向けられている。日本の女子教育の中味が、読み書きと計算であり、あわせて彼女たちが歌も習っていることや、かつては女子は家で教育を受けていたが、現在は学校に通っていること、しかし16歳以降は通学をやめて結婚することなどが綴られている [Ibid.: 35]。結婚については、当事者である女子の同意を得るとはいえ、両親によって決められること、花嫁の父親が花婿に家財など必要なものを贈ること、より多くの贈り物を差し出す者がより地位が高いとみなされることなどが記され、ここでも著者がインド社会との類似性を意識していることがうかがえる。19世紀後半以降、インドの知識人層の間では女子教育の推進や幼児婚の抑制を求める社会改革運動が展開され、いわゆる「保守派」からの改革に対する反発も含め、活発な議論が展開されていた。ナンダクンワルバー自身も女子教育や社会改革運動に強い関心を示している [Bhalodia-Dhanani 2012: 224-230]。

婚礼をめぐる慣習は詳細に紹介されており、花嫁と花婿が同じ盃から酒を飲む習慣が記され、日本語の「酒」という単語の発音をそのままグジャラーティー文字に転写した言葉も紹介されている。さらに、結婚後に女性が自らの歯を黒く塗る習慣も言及されているが、昨今では進歩的な女性はこの習慣を遵守しなくなっているとの説明も加えられている [Kanya Vachanmala 1907: 35-36]。なお、お歯黒の習慣は、欧米から日本を訪れた人々の注意をとりわけ引いた慣習のひとつであり、これに対する批判的な見解もしばしば表されている。

「日本の女性」のなかでは結婚にまつわる話が文章の大半を占めており、婚礼に続いては離婚に対する日本での認識（上流階級ではそれは不名誉なこととみなされ減多に起こらないことなど）についての説明が続く。結婚後の生活については、姑の権限の大きさに注意が向けられている。家事はすべて花嫁の責務となる

が、「インドの女性たちと同様に、」日本の妻たちは夫への献身で知られていると著者は主張しており、ここにもインドとの比較の視点が感じられる。このほかにも妻が客を丁重にもてなす様子に関して、日本とカーティヤードとの類似性が指摘されている。このように様々な具体例を述べたうえで、著者は「日本人女性の家政は、我々、インドの人々のやり方と非常によく似ている」と結論づけている [Ibid.: 36]。

日本とインドとの共通性は、年老いた両親に対する息子の献身についても指摘される。筆者はこの「よい行い」を「アジアの伝統」として語り、こうした行いは、世界の他地域ではアジアのようにみられないとしている [Ibid.: 37]。ここには「アジア」がそれ以外の地域——念頭におかれていたのはヨーロッパ、ないし欧米であろう——と比較されており、女性像を通じて、アジアの共通性や一体性が想像されている。日本は同じアジアの国として、インドと「伝統」を共有しており、そのよき「アジアの伝統」を維持しているモデルとして提示されることとなる。こうした日本像が女子向けの教科書にのみ掲載されていることは示唆的である。ここには、女性たちを「内」なる領域＝「精神的」領域＝「家」、そしてそこでの伝統を守る役割を担うものとして位置づけ、植民地支配や近代化のもとで変容する「外」の領域＝「物質的」領域＝「世界」に身をおく男性たちと対比させるという、当時のエリートたちの言説とのつながりをみることができるだろう [Chatterjee 1993: 116-134]。それは、前述の男子向けの教科書に掲載されていた「中国と日本」が、近代化し、産業を発展させ、日露戦争に勝利するなど、目覚ましい変貌を遂げる日本ばかりを描いていたのとは明確な対照をなしている。このように植民地期のグジャラーティー語教科書に現れる日本描写は、日本という事例を通じて、在地社会のエリートたちが、男子、女子のそれぞれに目指すべき社会像としてどのようなものを提示しようとしたのかを表している。

なお、この課の末尾3行では、「日本の女性は総じて美しい」との記述とともに、上流家庭の女性の顔の形状や、「黒く、まっすぐで、つややかな」髪の毛が描写されている [Kanya Vachanmala 1907: 37]。冒頭の挿絵とともに、こうした視覚的な描写は、読者の想像力をかきたてるものであっただろう。これらの視覚的描写は、次に取り上げる『日本語ガイド』においては、さらに前面に出てくることになる。

『日本語ガイド』

3点目の文献は、1906年ごろにボンベイで出版された商業出版物、『日本語ガイド』である。著者であるパールシー出身のラタンジー・フラムジー・シェートナーに

ついては、前述のように詳しい経歴がわからないのだが、本書の内容から判断すると、おそらく彼自身が日本に行った経験をもっていたり、日本語で読み書きができたわけではなかったと思われる。この作品は基本的には、彼が入手した様々な文献——おそらく主に英語文献——からの情報をまとめたものと推測される。

本書の表紙、及びそのすぐ後ろにある広告欄には、シェートナーがそれまでに出版した著作の題名が列挙されている。そこには、彼の代表作である百科事典のほかに、『ベーコン卿の著作』（フランシス・ベーコンの抄訳/翻案であろうか）、パールシー・シアターと関係していると思われる戯曲や歌集、グラス工芸など技術関連の著作が掲載されているほか、『日本と日本人』『中国の物語』『アジアの高潔な女性たち』などの題名をもつアジア関連の著作が並んでいる。このうち『アジアの高潔な女性たち』の題名の横には、「売り切れ」の言葉も付されている。広告欄に並ぶ19点のうちの1点はマラーティー語の著作で、『日本語の教師』という題名が記されている（ただしこの広告に記された題名自体はグジャラーティー文字で書かれている）[Shethna n.d.]。

広告のあとには漢字の例や、数字を漢字で表したもの、及び平仮名・片仮名の一覧が記されたページがあり、そのあとに再び広告のページが挿入されている。こちらの広告は百科事典（この時点で6巻まで刊行されている）のみを対象としたものであり、ギリシア神話の女神クリオの挿絵がページいっぱいに描かれ、その背後から伸びた2本の手が見開き状態の書物を女神の頭上に掲げている。開かれたページには、「知の円環あるいはグジャラーティー・エンサクロペディア」という言葉が並んでいる [Ibid.]。

以下ではまず『日本語ガイド』の概要をつかむために、テキスト内に設けられた節ごとにつけられた小見出しを書き出す（本書には目次はつけられていない）。これらの小見出しを列挙したうえで、そのそれぞれの後ろに各節の最初と最後のページ番号を記す。

【前半部：日本語ガイド】

日本語と文字について (1-9) / 日本語の役立つ用語集 (9-31) / 日本語の文法について (31-36) / 動詞について (36-39) / 丁寧語の形式 (39-42) / 現在形、過去形、未来形、全時制 (42-44) / その他 (44-46) / 一般的な文例集 (47-52)

【後半部：日本描写】

日本の皇帝「ムツヒト」と皇妃「ハルコ」(54-59) / 日本＝ニッポン (59-61) ²⁸/日

28 等号の前には英語の Japan をグジャラーティー文字に転写したもの（これがグジャラーティー語での「日本」という単語でもある）が記されており、等号の後ろには「ニッポン」とい

本の衣服の様式 (62-63) / 日本の建物とそのつくり (63-67) / 日本の女性の髪型と眠り方 (67-70) / 日本の人々の外見 (70-71) / 日本人の結婚 (71-73) / 日本の子どもたちの遊び (73-75) / 日本の文字の書き方 (75-76) / 日本国の人力車、駕籠、鉄道 (77-78) / 日本のレスラー (79) / 神道の寺院 (79-82) ²⁹ / 日本の軍隊 (83-87) / 伊藤博文侯爵 (87-90) / 東郷大将 (90-94) / 大山元帥 (94-96)

目次から明らかなように、本書の前半部は日本語教材となっているが、その内容は文法構造を基礎から理解したり、文字の習得も含めた読み書き全般を学ぶことを目指したものではない。ここに含まれているのは、会話に役立つような単語集、文例集、及び会話の際に知っていると便利であると思われる、ごく限られた範囲での文法知識である。シェートナー自身がいちから書いたものではなく、おそらく英語で書かれた日本語教材をもとに執筆されたものと思われる。用語集や例文集は、グジャラーティー語で書かれた単語や文章の横に、それに対応する日本語の単語、表現の発音をそのままグジャラーティー文字に転写したものが並べられている。これらに含まれている例文の内容も興味深いのだが、これについては別の機会に取り上げたい。

後半部の日本描写の部分には、主に3種類の情報が掲載されている。まず明治天皇・皇后の経歴や日本の地理についての説明（いわば日本についての基礎情報）が記されている。続いて日本の風俗や慣習についての説明（後半部のなかではこの部分が最も長い）、及び軍隊についての説明がなされている。最後は伊藤博文、東郷平八郎、大山巖の3名の人物伝が語られている。後半部にはいたるところにページ全面を使った挿絵が差し込まれており、特に日本の風俗・慣習に関わる部分では、挿絵が先にあり、それにあわせて文章がつけられているような印象も受ける。これらの挿絵は、同じ作者によって書かれた『日本と日本人』に掲載したものをここでも用いているとの説明があることから、もととなった『日本と日本人』自体が挿絵を中心とした構成になっている可能性が高い³⁰。

う日本語の音をグジャラーティー文字に転写したものが記されている。本ブックレットでは、グジャラーティー語文献のなかで日本語の発音をグジャラーティー文字にそのまま転写している場合には、その部分を片仮名で表している。

29 直訳では「神道の寺院」だが、神社を意味している。

30 『日本と日本人』については、前述のグリーンの著作でも言及されておらず、本ブックレット執筆時には筆者も本書を入手できていなかった。植民地政府はインドで出された出版物の内容を確認し、それらを保存していたことから、ブリティッシュ・ライブラリーには植民地期の在地諸語出版物がかなり網羅的に保管されている。シェートナーの著作についても、20世紀初めに出されたグジャラーティー語目録には、『知の円環』など数点が含まれているのだが、『日本と日本人』は掲載されていない[Blumhardt 1908, 1915]。しかしながら、実は本ブックレット再校時に、コロナ禍以来数年ぶりに同ライブラリーを訪れ、別の目録を調べるなかで本書を閲覧するこ

なお、明治天皇について、及び軍隊についての説明部分では、金額を表す際に円の値をシリングとペンスで換算して示している [Shethna n.d.: 58, 85]。このことも、シェートナーが依拠した文献が、もとをたどれば（その間に別の文献を経由しているとしても）イギリス人によって書かれたものではないかとの推測を導く。後半部で「日本の文字のサンプル」という説明をつけて挿入されているページには、「馬太傳第六章九節より十三節にいたる」(仮名は変体仮名を使用)とあり、聖書の日本語翻訳が用いられている。彼が参照した文献のなかに、キリスト教の宣教活動に関わるものが含まれていた可能性もある。

それでは前から順を追って内容をみてみよう。まず天皇・皇后の経歴や即位以降に遂行された改革が紹介され、次に日本の地理・人口、国名の由来などの説明が続く。ここでも「中国と日本」の文章と同様に、日本の発展の速さが強調され、その様子が中国と比較されている箇所がみられる [Ibid.: 61]。

次に続くのが、衣服、住まい、女性の髪型と眠り方、人々の外見、結婚、子どもたちの遊び、日本の文字、乗り物、相撲、神道などの日本の風俗・慣習に関する記述である。それぞれの節の長さはまちまちであるが、いずれのテーマについても関連する挿絵が含まれている。ここでは日本は近代化モデルとしては提示されておらず、その風俗・慣習、着物や住まいの様子など、生活・文化面を描くことに関心が寄せられている。ここに記された情報の典拠が何であるにしても、こうした話題が取り上げられていること自体が興味深い。読者はシェートナーの説明を介して、女性の髪の手入れ、髪形をくずさないための眠り方、婚礼の盃、あるいは入れ墨や相撲、人力車や駕籠の様子などを知り、そこに挟まれた印象的な絵をみながら、想像力を膨らませたことであろう。基本的には英語文献からの情報に依拠していたと思われるものの、これらの記述のところどころにインドの読者を意識した言葉も挟まれている。例えば、住まいについての説明では、日本人が家に入るときに靴をぬぐことを述べる際に、「インド人と同様に」との言葉を入れている [Ibid.: 65]。「サムライ」の言葉の後ろには「クシャトリヤ」の言葉を丸括弧のかたちで補足し [Ibid.: 91]、日本の弓の名人に関する物語を紹介する際には、マハーバーラタ（古代インドの叙事詩）やシャー・ナーメ（1000年前後にフェルドウシーによって書かれたペルシア語の民族叙事詩）のなかにある類似の物語に言及している [Ibid.: 83]。

日本の風俗についての紹介のあとには、日本の軍隊についての説明が続き、軍

とができた。残念ながら今回のブックレットの出版には間に合わなかったのだが、『日本と日本人』の内容については機会を改めて紹介したい。

備から軍隊の構成、兵士の俸給、彼らの生活にいたるまで記述されている³¹。これらの記述は、日露戦争に対するインド人エリート層の関心の高さを念頭にしながら組み込まれたものであろう。さらに本書末尾の10ページは、伊藤博文、東郷平八郎、大山巖の人物伝に充てられている。ここでは彼らの肖像画とともに、1905年ごろまでの彼らの経歴や業績が記されている。東郷についての記述のなかには「対馬の戦い」での日本の「大勝利」への言及があり、この部分が1905年5月以降に執筆されていることがわかる。

日露戦争についてのインドでの反応といえば、ネルーが自叙伝に書いた内容がよく知られている [Nehru 2004: 17]。当時、インド中間層のあいだでこの戦争が広く話題となっていた様子は、同時期にインドを周遊していた建築家伊東忠太の残した旅行記からもうかがえる。伊東はこのなかで、マドラス州を旅していたときに見聞したできごととして、車内でインドの異なる地域の出身者たちが、日露戦争について英語で議論していた様子（途中から伊東自身もこの議論に加わっている）を詳細に書き留めている。また、伊東は「イトウ」という名字のために、伊藤博文の親族であると誤解された経験についても記しており、伊藤博文の名前も知られていたことがわかる [伊東 1936: 430-432, 456]³²。こうした状況に照らし合わせると、シェートナーが本書の末尾に、日本の軍事についての情報や、伊藤、東郷、大山の人物伝を入れたのも、当時の購買者層、読者層の関心に沿った判断であったと考えることができるだろう。

挿絵

次に、すでに何度か言及している本書の挿絵に注目してみよう。挿絵はそれぞれ1ページ全体に広がるかたちで描かれており、こうした挿絵のみのページが合計で24枚ある。その多くは「異国情緒」にあふれ、同書の娯楽的要素を大いに高めるものとなっている。まず、どのような挿絵があるかを紹介するために、挿絵の下についているキャプションの翻訳を以下に列挙する。「日本の宗教施設（神道の寺院）」などにみられるような丸括弧に囲まれた説明は、原文でもこのかたちで記されている。

31 この部分には艦隊についての説明もあり、軍艦「吉野」の名前もみられるが、1904年5月の吉野沈没については触れられていない。シェートナーがこの箇所を記述するために参照した文献には、この時点までの状況が記されていないと思われる。

32 日露戦争での日本の勝利後には、インド東部のベンガル地方では、東郷平八郎や乃木希典の名になみ、子どもたちに「トウゴウ」「ノギ」などのニックネームがつけられることもあった [Watt 2005: 29]。

(1)日本の有名な皇帝 (2)皇妃 (3)ダイミョウ、女性の宮廷衣装 (4)日本の様々な人びと (5)キモノ服の様式 (6)髪型 (7)日本の人々はどのように眠るのか? (8)低いつくりの家 (9)家の光景 (10)日本の結婚の慣習 (11)子どもの世話のしかた (12)子どもの遊び (13)日本語の文字のサンプル³³ (14)前の時代の乗り物「カゴ」 (15)人力車 (16)初めての鉄道 (17)日本のレスリング (18)日本人女性が歌を習う (19)1871年より前の兵士 (20)現在の日本の兵士 (21)日本の宗教施設(神道の寺院) (22)伊藤侯爵 (23)東郷大将(日本のネルソン) (24)大山元帥

これらの挿絵のなかでまず目を引くのは、その多くが明治期のいわゆる「横浜写真」をもとにして描かれていることである。「横浜写真」とは、海外の人々に向けて販売された日本の風景・風俗をうつした写真のことであり、主に横浜で製造・販売されていた。『日本語ガイド』の挿絵のなかでは、とりわけ日下部金兵衛(1841-1932)によって撮影された(あるいは日下部のものと推定されている)写真と類似したものが目立つ。日下部は幕末・明治の横浜で、フェリーチェ・ベアトやライムント・フォン・スティルフリートのもとで働きながら技術を磨き、1880年前後に独立して自ら写真館を経営した。日本の風景・風俗を撮影してそれに美しい手彩色を加えた彼の写真は、欧米から来日した人々の土産物として人気があり、多くの写真や土産アルバムが海外へと渡っていった[斎藤 2004; 中村 2006; 横浜開港資料館 1990; Bennett 2006: 203-210; Wakita 2013]。今日においても欧米の様々な博物館、美術館に‘Kusakabe Kimbei’の写真が保存されている³⁴。

図1-図6では、(11)(14)(17)の挿絵を、日下部の(あるいは日下部のものと推定されている)写真とを並べて示している。このほかに(6)(7)(15)についても、日下部写真に類似した構図のものがみられる。これらの写真、もしくは写真をまとめた土産アルバム、写真をもとにつくられた絵葉書などをシェートナーが目にしていったのか、あるいはシェートナーの著作が出るより以前に、誰かがすでにこれらの写真をもとにした挿絵を出版しており、それをシェートナーが目にしたのか、

33 (13)は前述のように、聖書の日本語訳の一部を抜粋したものとなっている。

34 国内では横浜開港資料館をはじめ、複数の資料館、図書館が日下部の写真を収蔵している。海外でも複数の博物館、美術館に日下部の写真が収蔵されている。図2、図4、図6の画像は、キャプションに示したように、アメリカ合衆国の博物館、美術館のウェブサイトから入手したものである(いずれも著作権がなく、パブリック・ドメインの状態にあることが明記されている)。海外における日下部写真の所在に関しては、フンボルト大学ベルリンの森鷗外記念館(Die Mori-Ōgai-Gedenkstätte)からもご教示いただいた。

なお、横浜写真は輸出品ともなっており、輸出先には欧米のほか、香港、中国、英領インドも含まれている[斎藤 2004: 168-174]。そこから再輸出されたり、これらの地に滞在する欧米出身者に販売されたと推測されるが、一部はその土地の富裕層の手にも渡っていたものと思われる。



(બુઓ પાનું કુંમું) બચ્ચોને સાચવવાની રીઠી.

図1 「子どもの世話のしかた」
[Shethna n.d.]



図2
Getty Museum 所蔵
(<https://www.getty.edu/museum>)



આગસ્ટા વાજતની પાલખી "કાગો"

図3 「前の時代の乗り物「カゴ」」
[Shethna n.d.]



図4
Birmingham Museum of Art 所蔵
(<https://www.artsbma.org>)



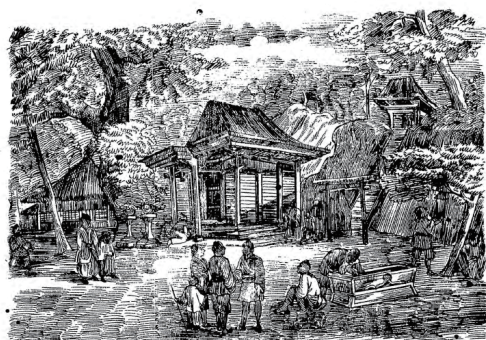
図5 「日本のレスリング」
[Shethna n.d.]



図6
RISD Museum 所蔵
(<https://risdmuseum.org>)

そのあたりの経緯は現時点ではわからない。横浜写真がこれらの絵の「出発点」になっていることが確認できるのみである。しかしながら、「西洋」の人々の需要にこたえてつくりだされた、日本の「異国情緒」あふれる風俗写真が、ボンベイで出版されたグジャラーティー語出版物のなかにまで入り込んでいたことは興味深い。「異国」の「珍しい」風俗をみて楽しんでいたのは、売り手が想定していた「西洋」の人々だけではなかったのである。

その他の挿絵についても検討してみよう。(5)「キモノ服の様式」と(21)「日本の宗教施設（神道の寺院）」は、F・L・ホークスの『アメリカ政府の命令によってアメリカ海軍M・C・ペリー提督のもとで1852、1853、1854年に行われたアメリカ艦隊の中国海域及び日本への遠征記』(1856年)（以下、『ペリー日本遠征記』ないし『遠征記』）に掲載されている挿絵を明らかにもとにしている。(5)「キモノ服の様式」は、『遠征記』では「母と子（下田）」というキャプションがついており、(21)「日本の宗教施設（神道の寺院）」には、「横浜の寺院」というキャプションが入っている [Hawks 2003]。ここでは後者について、『日本語ガイド』の挿絵と



(प्रा. १३०५) जे. पानी धर्मस्थल. (श्रीदेवी मंदिर.)

図7 「日本の宗教施設（神道の寺院）」[Shethna n.d.]

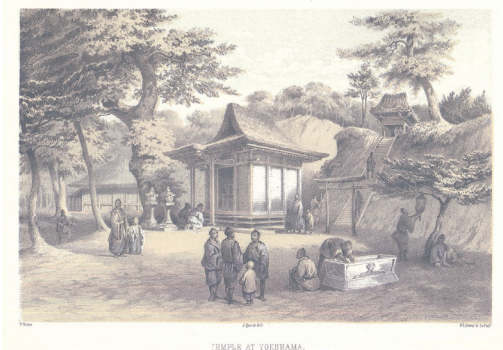


図8 「横浜の寺院」[Hawks 2003]

『遠征記』の挿絵とを並べて示した(図7-8)³⁵。これもまた、途中の経緯はわからないものの、ペリーがアメリカ議会上院に提出するためにホークスの手を借りて作成した『遠征記』のなかの挿絵が、巡り巡ってボンベイの出版物に入り込むことになったわけである。

(10)「日本の結婚の慣習」、及び(12)「子どもの遊び」については、スイス出身のエメエ・アンペールが記した『日本図絵 (Le Japon Illustré)』(1870年)のなかに含まれた「結婚式」「子どもの遊び」というキャプション付きの挿絵との部分的な類似が指摘しうる[Humbert 1870, I : 107; II : 125; アンペール 1969 : 33, 1970 : 29]。ただし、『日本図絵』に含まれる挿絵自体が、アンペールが日本に滞在した期間に収集した写

真や絵をもとにしている。『日本語ガイド』にある挿絵とより近い絵があり、そちらがもとになったと思われるが、現時点では特定できていない。

(1)「日本の有名な皇帝」、及び(20)「現在の日本の兵士」は、J・M・ミラー著『ロシア・日本戦争の公式の歴史』(1904年)に含まれる挿絵をもとにしている。ミラーの著作では、前者は「軍隊を視察する日本皇帝」、後者は「日本軍の様々なタイプの兵士たち」というキャプションがついている[Miller 1904]。ここでは後者について、『日本語ガイド』の挿絵とミラーの著作のなかに含まれる挿絵とを並べて示した(図9-10)。日露戦争の勝利への関心がインド中間層の間に広がるなか

35 「横浜の寺院」という説明がついた挿絵は、『ペリー日本遠征記』のなかでは、アメリカ海兵隊員を埋葬するにあたり、キリスト教牧師と仏教僧の双方によって葬儀がとり行われた様子を記した場面に差し挟まれている。



हालमे नेपाली सेपाह.

図9「現在の日本の兵士」
[Shethna n.d.]



図10「日本軍の様々なタイプの兵士」
[Miller 1904]

で、日露戦争や日本に関わる英語文献は欧米からインドにも流入していたものと推測される³⁶。

そのほか、(2) (23) (24) (25) は、明治皇后、伊藤博文、東郷平八郎、大山巖の肖像写真をもとにした挿絵である。(3)はページの片側に「ダイミョウ」の絵が、もう片側に「女性の宮廷衣装」の絵が印刷されているのだが、このうち「ダイミョウ」は、おそらく徳川慶喜の肖像写真を「出発点」にしている(図11-12)。この写真は、1867年に大阪城で、イギリス人技師のフレデリック・ウィリアム・サットンが撮影したものであり、同年に版画になったもの(ただし上半身のみ)が『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』に掲載されている[松戸市戸定歴史館 1992: 144-145]。

以上のように、シェートナーの『日本語ガイド』、及びこれより前に出版された『日本と日本人』に掲載されている挿絵は、その多くが当時、欧米で流通していた様々な起源をもつ挿絵や写真を「出発点」にしている。シェートナーや出版者が、自分たちでこれらの画像を複数の文献から集めた可能性もあれば、すでにこれらの画像をまとめて印刷した別の出版物が存在し、それをもとにしていた可能性も考えられなくはない。ここで示すことができたのは、あくまでそれぞれの

36 ネルーの自伝にも、当時インド北部の都市アラーハーバードに在住していたネルーが、日露戦争の勝利後に、日本に関する本を多数購入したことが記されている [Nehru 2004: 17]。



દાયમીયો. (જ્યો માનુ)

図11「ダイミヨウ」[Shethna n.d.]



図12 德川慶喜の肖像写真
[Bennett 2012: 107]

絵の「出発点」にすぎず、そこから『日本語ガイド』『日本と日本人』までの道のりをどのように辿りうるのかは、今後の課題である。

いずれにしても、上記に挙げた事例からは、挿絵の多くが「西洋」に向けた日本紹介・日本解説のために作成された写真・絵画を「出発点」としていたことが確認できた。日本から、あるいは日本を訪れた欧米出身者の手を介して、「西洋」に向けて発信された画像は、同時代のインドへも伝えられ、そこでも「異国」としての日本に関心をもつ人々の間で流通し、楽しまれていたのである。これらの画像がアジアにおいてどれほどの範囲に広まっていたのか、日下部金兵衛や彼と同時代の写真家たちによる「横浜写真」や『ペリー日本遠征記』などの挿絵をもとにした画像を含む出版物が、ほかにもこの時代のインドやその他のアジア諸地域でどれほどみられるのか、現時点では問いばかりが残されている状況だが、「アジアの形成」プロジェクトのプラットフォームを利用しながら、引き続き検討を進めたいと考えている。

結びにかえて

以上、20世紀初めに出された3点のグジャラーティー語文献における日本描写・表象を分析しながら、誰がどのような場で、いかなる目的のもとに、何をもとにして、どのように情報・知識・画像を選択し、それらを再構築しながら、それぞれの場や目的にあわせた日本像を伝えていったのかを検討した。そこには、男子向けと女子向けの教科書に示された日本表象の違いが、当時の在地エリートの間での男性、女性のあるべき姿や役割をめぐ

る言説に対応していたありさまや、商業出版物として出された日本語教材・日本紹介において、当時の購買者・読者層の求める情報や彼らの好奇心に応えるようなかたちで、情報や画像が選択されていた様子が明らかにされた。また、それらのなかでインドと日本、日本と中国、日本と西洋、西洋とアジアなど、様々な組み合わせで比較が行われ、それが読者の日本理解を促すものとして用いられていたことも確認された。さらに日本から欧米に（しばしば日本を訪れた欧米出身者を介して）発信された情報や画像が、インドに流入して在地語出版物の世界にも取り込まれていった様子が垣間見えた。挿絵の分析も含め、現時点ではまだ方向性を模索している部分が少なくないが、「知の創出と循環」グループでの「場」「源」「翻訳」をめぐる議論や、「アジアの形成」プロジェクトにおける「3つのC」を念頭におきつつ、引き続き植民地期のグジャラーティー語出版物の事例から、地域横断的な知のつながりを検討したいと考えている。

末尾になるが、「アジアの形成」プロジェクトは来年度も引き続き、複数のセミナーやワークショップを予定している。同プロジェクトのこうしたイベントにおいては、第2部で示したような特定の事例研究から、第1部で紹介したような現在の人文学・社会科学の枠組みに対する大きな問いかけまで、様々なかたちの地域・分野横断的な議論が展開されている。関心をもたれた方は、プロジェクトのウェブサイト (<http://shapingasia.net>) をご覧いただき、気軽にこれらのイベントを覗いていただければ幸いである。

参考文献

- アンペール. 1969/1970. 『幕末日本図絵 上・下』(高橋邦太郎訳) 雄松堂.
- 井坂理穂. 2016. 「ボンベイ——エリート層から見た「世界」——」羽田正編『地域史と世界史』ミネルヴァ書房.
- 井坂理穂. 2021. 「グジャラーティー語文学概観——近現代を中心に——」栗屋利江・太田信宏・水野善文編『言語別南アジア文学ガイドブック』東京外国語大学拠点南アジア研究センター.
- 井坂理穂. 2022. 「一九世紀インドにおける植民地支配——司法と教育」『世界歴史17 近代アジアの動態 一九世紀』岩波書店.
- 伊東忠太. 1936. 『見学紀行』龍吟社.
- 斎藤多喜夫. 2019. 『幕末明治 横浜写真館物語』吉川弘文館.
- 寺本羽衣. 2016. 「英系インド商会の貿易と商業ネットワーク——横浜の居留地貿易の事例から——」『南アジア研究』28, 34-65.
- 中村哲信. 2006. 『明治時代カラー写真の巨人 日下部金兵衛』国書刊行会.
- 羽田正. 2011. 『新しい世界史へ——地球市民のための構想』岩波書店.
- 羽田正. 2018. 『グローバル化と世界史』東京大学出版会.
- 濱下武志. 2011. 「グローバリゼーション下の地域研究の新たな課題」『北東アジア研究』20,1, 17-29.
- 松戸市戸定歴史館. 1992. 『将軍のフォトグラフィー——写真にみる徳川慶喜・昭武兄弟——』松戸市戸定歴史館.
- 横浜開港資料館編. 1990. 『増補 彩色アルバム 明治の日本 《横浜写真》の世界』有隣堂.
- Alatas, Syed Farid and Vineeta Sinha. 2017. *Sociological Theory beyond the Canon*. London: Palgrave.
- Baines, J.A. 1893. *Census of India, 1891, General Report*. London: The Indian Government.
- Basu, Nandita. 2022. 'Bangamahilār Japanyātrā (1915): The Earliest Record of an Asian Woman's Travel to Japan', in Rita Banerjee (ed.), *India and the Traveller: Aspects of Travelling Identity*. New Delhi: Bloomsbury.
- Bennett, Terry. 2012. *Photography in Japan 1853-1912*. Tokyo: Tuttle Publishing.
- Bhalodia-Dhanani, Aarti. 2012. 'Princes, Diwans and Merchants: Education and Reform in Colonial India', unpublished Ph.D. dissertation, The University of Texas at Austin.
- Blumhardt, J.F. 1908. *Catalogue of the Library of the India Office, Vol.II, Part V*,

- Marathi and Gujarati Books*. London: Eyre and Spottiswoode.
- Blumhardt, J.F. 1915. *A Supplementary Catalogue of Marathi and Gujarati Books in the British Museum*. London: British Museum.
- Brosius, Christiane and Joanna Pfaff-Czarnecka. 2019. 'Shaping Asia: Connectivities, Comparisons, Collaborations', *ISA-e-Forum*, 1-10.
<https://www.isaportal.org/resources/resource/shaping-asia> (2022年12月1日閲覧)
- Brosius, Christiane, Claudia Derichs, Joanna Pfaff-Czarnecka, and Ursula Rao. 2021. 'Shaping Asia: Connectivities, Comparisons, Collaborations', *The Newsletter*, 90, Autumn, International Institute for Asian Studies.
<https://www.iias.asia/the-newsletter/article/shaping-asia-connectivities-comparisons-collaborations> (2022年12月1日閲覧)
- Chakrabarty, Dipesh. 2000. *Provincializing Europe: Postcolonial Thought and Historical Difference*. Princeton and Oxford: Princeton University Press.
- Covernton, J.G. 1906. *Occasional Reports No.2. Vernacular Reading Books in the Bombay Presidency*. Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing.
- Derichs, Claudia. 2017. *Knowledge Production, Area Studies and Global Cooperation*. Abingdon: Routledge.
- Derichs, Claudia. 2020. 'Area Studies and Disciplines: What Disciplines and What Areas? Current Debates', *International Quarterly for Asian Studies*, 51, 3-4, 35-41.
- Derichs, Claudia. 2023. 'Translating the Family', in Erdmute Alber, David Warren Sabean, Simon Teuscher, and Tatjana Thelen (eds.), *The Politics of Making Kinship: Historical and Anthropological Perspectives*. New York: Berghahn Books.
- Derichs, Claudia, Faiza Muhammad Din, and Manja Stephan-Emmrich. 2023. 'Becoming Professionals: Virtual Mobility, Gender, and Religious Knowledge', in Lina Knorr, Andrea Fleschenberg, Sumrin Kalia, and Claudia Derichs (eds.), *Local Responses to Global Challenges in Southeast Asia: A Transregional Studies Reader*. Singapore: World Scientific.
- Gait, E.A. 1913. *Census of India, 1911, Vol. I, Part I, Report*. Calcutta: Superintendent Government Publishing.
- Green, Nile. 2011. *Bombay Islam: The Religious Economy of the West Indian*

- Ocean, 1840-1915*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Green, Nile. 2022. *How Asia Found Herself: A Story of Intercultural Understanding*. New Haven and London: Yale University Press.
- Gujarati Chchhatthi Chopdi*. 1907. Bombay: Macmillan.
- Gujarati Chchhatthi Chopdi*. 1917. Bombay: Macmillan.
- Hansen, Kathryn. 2018. 'Boucicault in Bombay: Global Theater Circuits and Domestic Melodrama in the Parsi Theater' in Christine Gledhill and Linda Williams (eds.), *Melodrama Unbound: Across History, Media, and National Cultures*. New York: Columbia University Press.
- Hawks, Francis L. 2003(1856). 完全復刻版『ペリー日本遠征記』第1巻（解説 照屋善彦）*Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, Performed in the Years 1852, 1853, and 1854, under the Command of Commodore M.C. Perry, United States Navy, by Order of the Government of the United States*. Washington: A.O.P. Nicholson. 南西マイクロ.
- Heryanto, Ariel. 2020. 'A Response to Claudia Derichs's "Area Studies and Disciplines"', *International Quarterly for Asian Studies*, 51, 3-4, 41-44.
- Humbert, Aimé. 1870. *Le Japon Illustré*. I, II. Paris: Librairie de L. Hachette.
- Isaka, Riho. 2021. 'Travelling and Food in Colonial India: Experiences of Japanese Travellers in the Early Twentieth Century', *International Journal of South Asian Studies*, 11, 33-46.
- Isaka, Riho. 2022. *Language, Identity, and Power in Modern India: Gujarat, c.1850-1960*. Abingdon: Routledge.
- Kanya Vachanmala, Pustak Trijun*. 1907. Bombay: Macmillan.
- Lambert-Hurley, Siobhan and Sunil Sharma. 2010. *Atiya's Journeys: A Muslim Woman from Colonial Bombay to Edwardian Britain*. New Delhi: Oxford University Press.
- Miller, J. Martin. 1904. *Official History of the Russian-Japanese War: A Vivid Panorama of Land and Naval Battles*. Chicago (?).
- Nehru, Jawaharlal. 2004. *An Autobiography*. New Delhi: Penguin Books.
- Pfaff-Czarnecka, Joanna. 2020. 'Shaping Asia through Student Mobilities', *American Behavioral Scientist*, 64, 10, 1400-1414.
- Reid, Anthony. 1999. 'Studying "Asia" in Asia', *Asian Studies Review*, 23, 2, 141-151.

- Roy, Ananya 2016. 'Where is Asia?', *The Professional Geographer*, 68,2, 313-321. Shaping Asia. <http://shapingasia.net> (2022年12月1日閲覧)
- Shastree, Keshavram K. 1980. 'Monolingual and Bilingual Dictionaries in Gujarat', in B.G. Misra (ed.), *Lexicography in India*. Mysore: Central Institute of Indian Languages.
- Sheel, Kamal. 2021. 'India-China "Connectedness": China and Pan-Asianism in the Late Nineteenth- to Mid-Twentieth-Century Writings in Hindi', in Tansen Sen and Brian Tsui, *Beyond Pan-Asianism: Connecting China and India, 1840s-1960s*. New Delhi: Oxford University Press.
- Shethna, Ratanji Framji. n.d. (1906?). *Jepani Bhashano Bhomiyo*. Mumbai: P.D. Mukadam.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. 2008. *Other Asias*. Oxford: Blackwell Publishing.
- Yang, Anand A. 2021. 'China in the Popular Imagination: Images of *Chin* in North India at the Turn of the Twentieth Century', in Tansen Sen and Brian Tsui, *Beyond Pan-Asianism: Connecting China and India, 1840s-1960s*. New Delhi: Oxford University Press.
- Wakita, Mio. 2013. *Staging Desires: Japanese Femininity in Kusakabe Kimbei's Nineteenth-Century Souvenir Photography*. Berlin: Reimer.
- Watt, Carey Anthony. 2005. *Serving the Nation: Cultures of Service, Association, and Citizenship*. New Delhi: Oxford University Press.